

「底が突き抜けた」時代の歩き方 392

メディアによって作られる見せかけの現実であるイメージの中で、
誰もが見物人になってしまう「スペクタクルの社会」

我々は時代が進むなかで、少しは賢くなってきているのだろうか。高度な科学文明社会に生きている我々人間は、どうやら根本的な錯覚に陥っているように思える。たとえば、コンピューターを自由に操作できるからといって、単にマニュアルどおりに操作できるだけのことにすぎないのに、あたかも自分がコンピューターをつくりだしたかのような、あるいは、コンピューターを操作する自分がコンピューターの能力に肩を並べることができるほどに賢くなったかのような錯覚に、どこかで見舞われているのを感じる。コンピューターを自由に操作する自分は、コンピューターに自由に操作されている自分でもあるという観点が、そこには全く欠落しているのだ。

動物行動学、行動生態学の学者である長谷川眞理子は03・4・27付朝日で、『驚くべき技術を手にし、これらの科学技術が日々進んでいくのを見ている人類が、自分自身の脳の働きも同様にリアルタイムで進んでいると錯覚』することによって、99年に起きた東海村ウラン燃料加工施設における臨界事故や、昨年から今年にかけての東京電力その他の原子力発電所でのずさんな管理実態の発覚、また本年2月1日にアメリカのスペースシャトル・コロンビアの大気圏再突入時の分解事故など、さまざまなヒューマンエラーが起こっている例を挙げて、『ヒューマンエラーは、たまに気を抜いたときに起こることだと過小評価している』のではないかと指摘し、我々がラップトップ（コンピューター）を抱えた「石器人」にほかならないと戒める。

《しかし、人類は、少なくともおよそこの5万年にわたって、その基本的な脳の働き方において少しも変わっていないのである。物質文明の発展にだまされてはいけない。物質文明、技術文明は確かに進歩してきたが、それは、言語を使った学習と教育、記録による伝達によってどんどん蓄積されてきたからであって、一人ひとりの人間の脳が、毎世代、石器時代よりも進化して賢くなることによって進歩してきたのではない。

それが何より証拠には、人類史における伝統的な生計活動である狩猟と採集で現在も暮らしをたてている地域で生まれた人々でも、子どものころから教育すれば、パイロットにも脳外科医にもなる。一方、技術文明の恩恵を十二分に受けて暮らしている私たちのうち、コンピューターや飛行機を自分でつくれる人が何人いるだろうか？ 私が飛行機に乗り、コンピューターをあやつって、100年前の人々にはできなかったような仕事をして、それは、私自身の脳が100年前の人々よりも優れているからではないのである。

およそ5万年前までにできあがった、非常に可塑性に富む人類の脳が、一致団結して知恵を蓄積した結果、こんな技術や社会ができた。しかし、この技術的蓄積と生活環境の改変は、あまりにも急速に起こったため、人類は、自らの脳が自信をもって処理できる以上の情報を氾濫させ、数々の巨大施設を築き上げてしまった。私たちは、理性によって原子力やロケットを利用するすべを開発したが、からだや感覚はそんなものにはついていけないのである。

未知への人間の挑戦と、その結果獲得した技術は素晴らしい。しかし、私たちは、ラップトップをかかえた石器人でもあるのだと、もう一度謙虚に認識する必要があるだろう。》

論理的な説得力をもって簡潔に説明されており、疑問の余地はないように思われるが、要は我々は科学技術の成果を受け取っているだけであって、我々の脳はその成果に適応させているにすぎないということだ。我々は100年前の人々と比較してけっして賢くなっているわけではないということは、彼女の説明でよくわかる。だがこのことは、100年前の人々と比較して現代の我々はけっして劣っているわけではないということも意味する筈だ。しかし、実感としていえば、我々は昔の人々と比較して賢いどころか、劣っているように思われてならない。実感があくまでも実感であるかぎり、当てにならないとしても、もしその実感になんらかの根拠があるとすれば、それは一体どこからやってくるのだろうか。

この問いに先の説明ではこう触れられている。人類の脳が作り上げてきた現代社会における《技術的蓄積と生活環境の改変は、あまりにも急速に起こったため、人類は、自らの脳が自信をもって処理できる以上の情報を氾濫させ、数々の巨大施設を築き上げてしまった。私たちは、理性によって原子力やロケットを利用するすべを開発したが、からだや感覚はそんなものにはついていけないのである。》と。《人類は、自らの脳が自信をもって処理できる以上の情報を氾濫させ》たために、我々の脳もからだも感覚も《そんなものにはついていけな》くなった、というのがその要点である。確かに我々は《ついていけな》くなっているのを、日々強く実感している。だが《ついていけな》くなった我々は、押し寄せてくる膨大な情報に対してどのような構えをみせるのか。

膨大な情報の一つ一つに我々は反応しなくなるのである。いいかえると、情報に対して無関心になるのだ。いうまでもなく情報には、やりすごしてはならない情報とやりすごしてもかまわない情報とが含まれている筈なのに、あらゆる情報に対して無関心になることによって、我々は膨大な情報の攻撃から身も心も防ごうとする。つまり、閉じ込めようとする。本当は情報が氾濫する現代社会にあって、肝心な情報と肝心でない情報とを取捨選択する能力を身に付けながら、どのように生きていくのかが我々一人一人に問われているのに、どのような情報に対しても等しく無関心な態度を貫くことによって、情報が開示している未知の世界にかかわろうとせずに、自分の小さな既知の世界に閉じ込めて、波風の立たない安穩な日々を過ごすことが当たり前のようになってしまっている。

《自らの脳が自信をもって処理できる以上の情報を氾濫させ》てきた人類は、その膨大な情報に対して無関心のなかに閉じ込められるようになってしまったのだ。ここでアフガニスタンを題材にした映画『カンダハール』の映画監督モフセン・マフマルバフが、01年3月のバーミヤン石仏破壊の直後に書き上げたレポート（『現代思想』01年10月臨時増刊）のなかで、《バーミヤンの世界最大の仏像の破壊は、世界中の同情を集め、仏像を守ろうとする芸術文化の全ての支持者を引きつけた。しかしなぜ、国連高等弁務官の緒方氏を除いて、このひどい飢饉によって死んだ100万人のアフガン人に対しては、誰も悲しみを表明しないのか。なぜ誰もこの高い死亡率の原因について発言しないのか。腹を空かせたアフガン人の死を防ぐ手だてについては話されないのに、なぜ皆仏像の破壊についてそんなに声高に叫ぶのか。現代の世界では、人間よりも像のほうが大事にされるというのか。》と、憤然としていたのが想起される。

バーミヤンの石仏破壊に寄せる人々の関心が、どうして100万のアフガン人の餓死者に対する関心にまで拡大せずに、無関心としてやりすごされるのか、とマフマルバフは問うているのだ。だから彼はどうしても、《アフガニスタンは他国の干渉に苦しめられたというよりもむしろ、その無関心に苦しんだ。》といわざるをえなくなる。あることへの関心は他への膨大な無関心の上に成り立っているのが、マフマルバフの指摘から浮かび上がってくる。一つの関心は他への無関心の表明であり、自らの関心が自らの無関心に切り込んでいくというようにはなっていないのだ。したがって、ここにみられるのは関心の党派性ともいえるべき事態であり、人々は自らの関心の外に自分自身を解き放ち、そこで生みだされてくる無数の自分に出会い、未知の可能性にむかって自分の関心の限界を明らかにしていくということも起こりえないのである。

いうまでもないことだが、世界の無関心に苦しんでいるのはなにもアフガニスタンだけではない。関心は他の膨大な無関心の上に成り立っているとすれば、無関心に苦しんでいるアフガニスタンは世界の各地に無数に点在しているのが窺われる。マフマルバフがアフガニスタンについて、《他国の干渉に苦しめられたというよりもむしろ、その無関心に苦しんだ》と記すことによって関心が掘り起こされるという、そんな機会にも恵まることがないほどに、無関心の彼方の無関心が莫大に広がっているのが想像される。世界の《無関心に苦しん》でいるアフガニスタンの飢餓の現実を直視しているマフマルバフを彼のレポートから透視すると、「セルビアとクロアチアの侵略者の攻撃にさらされ」ながら、アフガニスタンと同じく世界の無関心に苦しんでいたボスニアの、セルビア軍に包囲されたサラエボで、ベケットの『ゴドーを待ちながら』を上演していたスーザン・ソントグの姿が思い浮かんでくる。

「サラエボでゴドーを待ちながら」という上演の意図をこめて、「ゴドー」がやってくるのを最も切実に待ちかねているサラエボで、ソントグは遂に現れることのない『ゴドーを待ちながら』を上演していたのだ。「身をもって目撃すること、参加すること」を

心掛けているソntagは、評論家の浅田彰との対談（『S A P I O』94・9・22）でこう語っていた。

《人々は巨大な強制収容所に閉じ込められているようなものです。サラエボには戦前60万～70万人が住んでいたのですが、多くの人々が去り、多くの人々が殺された後、今もなお、推計にも寄りますが、40万人ほどの人々が住んでいます。彼らは逃げ出すことができず、1945年のベルリンや東京とあまり変わらないように見える廃墟の都市に暮らしているのです。多くの人々がこういう廃墟の映像をテレビで見て、「あの空っぽになった廃墟を見ろよ、なんてひどいんだ」と言う。実のところ、その廃墟は空っぽではなく、人々が中で暮らしているのです - 暖房もなく、窓ガラスもなく、電気もなく、水もなく、わずかの食料しかなく。それは世界最大の強制収容所なのです。》

《(…)包囲が近い将来には終わらないだろうと誰もが気付いていることです。実際、包囲を解くことはどちらの利益にもなりません。包囲が解かれれば誰もが脱出するだろうけれど、(…)戦争全体が解決されてはじめて包囲が終わるでしょうが、私は率直なところ数年中にそういう解決が可能だとは思いません。サラエボの人々は何年も今の状況に閉じ込められたままだろうと思うのです。》

ソntagは、《巨大な強制収容所に閉じ込められているような》サラエボの状況に《完全に悲観的》だが、《自分にできるわずかのことをするために》サラエボに行くと答えて、こう説明する。

《私にとってサラエボに行くことはきわめて個人的な決断だということです。いや、決断と言うよりも、良心の呼びかけであって、私はサラエボに行かずにはいられないのです。

その上で言えば、私はサラエボで、自分にとって有益である以上に、サラエボの人たちにとって有益なことをしようと努めてきました。サミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』を演出・上演したのもそのためで、サラエボの状況のなかでこの劇を舞台にかけることには特別な意味があると思ったからです。それは、現地の状況をドラマ化し、世界の注目を集めるという意味でも、有益でした。》

サラエボの絶望的な状況のなかで、ソntagは希望の明かりを灯すために何かをやるうとしているのではない、と決然と答えている。

《サラエボをめぐる客観情勢に何の希望も持っていませんし、もちろん自分が希望をもたらし得るとも思っていません。自分がサラエボ市民だったら何の希望も持てないでしょうから、私はそんなことを言える立場にいないのです。それでも、何ひとつ起こっていないよりは、何かが起こっているほうがましだろう。私はそんな何かをするために行くのであって、希望を与えに行くものではありません。(中略)それは状況全体を変えはしないのです。》

彼女のスタンスがここに見事にあらわれている。《状況全体を変えはしな》くとも、《私は個人としてできるだけのことをするまでです - 絶望的な現実のなかにあっても》とい

うことなのだ。状況が絶望的であろうとなかろうと、《私は個人としてできるだけのことをするまで》あり、自分がやろうとしないことの口実に絶望的な状況をけっして持ち出さない姿勢がそこに貫かれている。このソントグの姿勢について私は通信の287号(02年3月5日記)で、こう論じた。

《ベトナムやサラエボが戦火に見舞われているから、矢も盾もたまらず飛んで行くのではなく、彼女はいつも自分の場所で<戦火>をかかえこんでいるからこそ、自分の足元の<戦火>が彼女を絶えず戦乱の地へと赴かせずにはおかないのだ。というより、彼女が終始たたくいつづけている<戦火>にとって、ベトナムやサラエボもまた、その<戦火>が目に見えて拡大している地域にほかならないということだ。自分の<戦火>とさまざまな地域における戦火とが重なり合ってしまうのである。だから、彼女はいつでも、どこでも、そこで自分が最大限にできる有益なことはなにか、と考えつづけているそのままの姿勢を、赴いた場所に向かわせてしまうのだ。おそらく自分が考え、発言し、なにかを表現しつづけるのは、そうした関係をつくりだすなかでこそ最大限に発揮される、と彼女がいおうとしているのが感じられる。「直接の体験の具体性」とは、そういうことではないか。想像力を広げるなかで目にみえない関係性を追いつづけるよりも、目にみえない遠い関係性を自分の目の前にたぐり寄せてくるなかで、なにか有益なことを表現しつづけていきたいというのが彼女の立場であり、そこには具体性への手触りからますます遠く離れて、抽象的な表現行為のなかに埋没しつつある同年代の作家や知識人に対する批判がこめられているのが、明らかに感じられる。》

「無関心であることはどういうことであるのか」という問いに即して、彼女がいわんとしているところを改めて考えてみたい。ソントグが足を踏み入れてきたベトナムやサラエボとは、単なる戦火の地ではなく、世界中の無関心にさらされている苦痛が発している戦火の地にほかならなかった。おそらく冷戦終結以降の戦火は、世界中の無関心のなかで惹き起こされているといってもよかった。彼女のサラエボでのベケットの『ゴドーを待ちながら』の演出・上演は、したがって世界中の無関心に対する戦いにほかならなかった。《それは、現地の状況をドラマ化し、世界の注目を集めるという意味でも、有益でした。》と彼女がいうとき、サラエボを訪れて『ゴドー』を演出・上演したというよりも、世界中の無関心のなかでの演出・上演としての意味を提出していたのだ。

このソントグの姿勢は、《私は映画をやめて、ほかの職業を探そうと思った。》ほどに、アフガニスタンの希望のない、打ちひしがれた飢餓と貧困の現実のなかで、映画『カンダハール』を撮りつづけたマフマルバフの姿勢と重なってくる。《国連のアフガン情勢についての人道アドバイザーである、バングラデシュのカマル・フセイン教授は、2000年夏に私たちのオフィスを訪れ、自分は10年間にわたって、意味のない報告を国連にしていたのだと言った。彼は、世界を目覚めさせることになるかもしれない、私の映画製作の手伝いに来てくれたのだ。私は言った。「私は影響があることを願っている。》

と、マフマルバフはレポートのなかに書き記しているが、『世界を目覚めさせることになるかもしれない』というようなことはありえないとしても、「私は影響があることを願っている」という彼の構えは、『ゴドー』の演出・上演によって《世界の注目を集め》たいと願うソントグの構えと、全く同等であった。

なぜ、世界はバルカン半島やアフガニスタンに無関心なのか。マフマルバフは先の記述に続けて、『アフガニスタンは他国の干渉に苦しめられたというよりもむしろ、その無関心に苦しんだ。つまり、もしアフガニスタンが石油収益を持つクウェートだったら、話は違ってくる。しかしアフガニスタンには石油もないし、隣国の人々はアフガン労働者に満足な賃金も与えずに追放している。職業の選択に失敗したら、残された道は、難民になること、タリバンに参加すること、ヘラート、バーミヤン、カブール、カンダハールの街角に倒れること、そして世界の無知に殺されることくらいである。』と記しているように、バルカン半島やアフガニスタンやアフリカの大半の国々には、石油に限らず、世界中の関心を惹きつけるような天然資源も、有力な文化遺産も、その他の経済的な資産もなかった。だから、それらの地域で戦闘が起こった場合でも、世界中が無関心でいられた。

しかし、9・11以降のアフガニスタンの場合は事情が異なってくる。9・11に関連するテロ組織のアルカイダがアフガンのタリバン政権と通じているとみなされて、アメリカを筆頭とする世界中の関心を集め、激しい空爆を浴びるという悲惨の追い打ちを被らねばならなかった。つまり、アフガニスタンは世界中の無関心に苦しむなかで、更に関心の偏向によっても苦しまねばならなかったのだ。無関心は当然ながら、無知を伴っている。いいかえると、無関心であるから無知で済まされるし、逆に無知はけっして関心を掘り起こさないのだ。無関心であることが恐ろしいのは、存在しないことと同義的であるからだ。要するに、無関心は無意識的な排除にほかならない。アフガニスタンやバルカン半島やアフリカ諸国への世界中の無関心は、世界中の関心が限定されていることと同時に、関心の集中が膨大な無関心を生み出していることを意味している。

関心の集中が膨大な無関心と引き換えになっているなら、知識の集中が膨大な無知と引き換えになっている筈である。朝日新聞編集委員の清水克雄は『世界コミュニケーション』（ノルベルト・ポルツ著）の書評（03・2・23付朝日）で、『情報や知識は物事をよりよく理解するために役立つはずだ。ところが私たちは情報や知識はあふれているのに、ますます先のことは分からなくなるという不思議な時代に生きている。なぜ情報量の増大は、かえって世界を見えにくくするのか。／それは「私の知識は増えるが、私の無知の増え方はもっと速い」から』であり、そこに『情報社会のパラドックスともいえる難問や奇妙な社会現象』が生じてくると、著者の考えを示して、次のように解説する。『現代を地球規模で情報化が進む世界コミュニケーションの時代ととらえる著者は、そこで起きている大きな問題は空間のもつ意義が減少して、かわりに時間の役割がふくら

んでしまったことだと強調する。そのために人はいつも時間に追われている。

情報は大量にあふれているが、時間不足のせいで大半は消化されずに終わり、いつも不完全な情報しかない状態におかれる。知識の爆発的増大に追いつけるような人間は誰もいないので知らないことばかりが増えていく。その結果、「一番重要な知識は、何が知らないでいいことを、知ることである」という奇妙なことになるのだという。

メディアによって世界が一つになったために人々が倫理的な不安感を抱くようになったという指摘も考えさせられる。私たちは世界中で起きた出来事を目にして道徳的な痛みを感じるが、身近な問題のように自分で解決はできない。それなのに、全世界についての責任を負わされたような気分させられることが混乱を生みだしている。

日常を観察する人こそが知識人だ、という著者は、携帯電話からブランド熱、環境問題まで、現代社会の森羅万象に切り込んでみせる。論理の飛躍もあるが、最近の世界の混迷を見るにつけ、知識社会は無知社会でもある、という主張は、ますます説得力を持ってくるように見える。》

この著作を手にしていないので、あくまでも先の書評に対応して考えるほかないが、「私の知識は増えるが、私の無知の増え方はもっと速い」という問題は、私の関心は増えるが、私の無関心の増え方はもっと速い、という問題でもある。情報量の増大は情報量の消費に追われるために、世界が身近になってくる分、世界はますます見えにくくなっていく。知識以上に無知の増加が速い、という見方はその通りのように思われ、レトリックとしてはわかるが、問いも生じる。それは、本当に「私の知識は増え」ているのだろうか、という疑問にたえずさらされているからだ。情報量はますます増大しており、《時間不足のせいで大半は消化されずに終わり、いつも不完全な情報しかない状態》に我々が置かれているのは間違いない。しかし、その状態は「私の知識は増える」ことをけっして意味していない。

情報は批判的思考を刻み込まれないかぎり、「私の知識」に転化することはない。したがって、情報量がいくら増大しても、そのことは「私の知識は増える」機会が増えることを意味するだけで、「私の知識は増える」ことを全く意味しない。一つ一つの情報が「私の知識」になるためには、批判的思考の^{くわ}鍬入れが丁寧に行われなくてはならない。ちょうど乾いた土壌にタネばかりをいくら撒いても、土壌そのものが耕されないかぎり、タネはけっして発芽しないのと同じことである。だから、情報量は増大しても、「私の知識は増える」ことはない。だが情報量の増大は、それらの情報を「知らないよりも知っているほうがよいかもしれない」現代社会のなかで、たえず消費されることを求めているので、「私の知識は増え」ないにもかかわらず、「私の無知の増え方はもっと速い」ようにいつも感じられているのだ。

おそらく情報量の増大はむしろ、「私の知識は増え」なくしている。なぜなら、《情報量の増大は、かえって世界を見えにくくする》ことによって、一つ一つの情報を知識に

転化していく時間を各人の生活のなかで生み出すよりも、膨大な情報量を消費する時間のなかに各人を立たせて、情報を知識に転化させる孤独で地味な作業を遠ざけていくようになるからだ。それ故に「私の知識は増えるが、私の無知の増え方はもっと速い」という感じ方を適切にいうなら、情報量の増大はかえって無知を加速させており、情報化社会は知識の空洞化社会といわざるをえない。もちろん、それは無関心の加速でもあることによって、関心の空洞化社会でもあるのだ。《日常を観察する人こそが知識人だ、という著者》ノルベルトの真意は、日常に対する無知が加速しているというところにあるだろう。みえない遠くへの無関心は、みえる身近への無関心とパラレルな関係にあるということが、そこに示唆されている。

無関心と無知が永遠の二人三脚を築いているなら、無知をなくするためには関心を掘り起こせばよいということになる。関心を引き寄せるためには、世間から注目されるようになればよい、というのが情報化社会での大きな傾向であろう。ソントグが『ゴドー』を演出・上演したのも、戦火のサラエボに世界中の注目を向けさせる一つの手立てでもあったし、マフマルバフの映画『カンダハール』も、世界中の無関心に苦しんでいるアフガニスタンの悲惨な現実を、映画を娯楽として享受している先進国の我々に問いかけるために映像化された。しかし、ソントグもマフマルバフも世界中の無関心と戦うために、演劇や映画製作を効果的に行っているのであって、世界の注目を浴びるためだけのパフォーマンスを行っているわけではなかった。そして、なによりも彼らは戦火のサラエボやアフガニスタンの飢餓の現実の真っ只中に身を置いて、一步も退くことのできない表現活動を展開しているという自負に支えられていた。

だからソントグからすれば、こちらに振り向かせるためにはメディアの関心を集めればよく、メディアの関心を集める現実をつくりだすことによって、世界中の関心が注がれるようになるという、現実よりもイメージ重視の世界的な傾向は批判の対象にほかならなかった。現実のありのままの姿において世界中の関心を引き寄せるのではなく、現実が付与されたイメージのみが派手に強調され、突出させられていくことによってメディアの関心を促すことは、しかしながら、あくまでもイメージに対する関心以上のものではなく、イメージ抜きの実現に対する世界中の関心とは異なっていたからだ。現実にイメージが付与されるとき、その現実はずでにイメージに覆われてしまっているのもはや現実とイメージは切り離すことができず、したがって、イメージへの関心がイメージ抜きの現実への関心に深まることは起こりえなかった。ソントグは近著の『他者の苦痛へのまなざし』の中で、こんな批判を展開している。

《非常に有力な分析によれば、われわれは「スペクタクルの社会」に生きている。一つ一つの出来ごとがわれわれにとって現実となる——つまり関心を喚起する——ものとなるためには、それはスペクタクル化されねばならない。人間自体がイメージとなること、つまり有名人になることを志向している。現実退き、現実の再現のみ、メディアのみ

が存在する。

これはすてきなレトリックである。その上、多くの人にたいして説得力をもっている。なぜなら現代性の特徴の一つに、経験は予測できるものだという感覚を人々が好むということがあるからである。(この見方は、自分の描くものは幻影ないし捏造物だと考えた故ギー・ドゥボール、見せかけの現実であるイメージが現在存在するもののすべてであると主張するジャン・ボードリヤールの著作と、とくに関連しており、フランス的特性のように見える。)戦争も、現実には存在すると見える他のすべてのものの同様に、メディアによって作られると一般に言われている。これは、サラエヴォ包囲の時期にサラエヴォに遠足にきたアンドレ・グリュックスマンをはじめとする数人の著名なフランス人の状況分析であった。すなわち戦争の勝敗を決めるのは、ひとえにメディアであって、サラエヴォあるいはボスニアで生起する事態によってではない、と彼らは主張した。「西欧」は戦争それ自体を次第にスペクタクルとして見るようになってきた、としばしば指摘されている。現代の政治や文化のなかで、誤っている、空虚である、愚かにも幅をきかせている、と感じられるものを理解しようとする多くの人々が、現実の死——理性の死、知性の死、純文学の死というのと同じように——という概念をさほど深く考えることもなく受け入れているように見える。

現実がスペクタクルと化したと言うことは、驚くべき偏狭な精神である。それは報道が娯楽に転化されているような、世界の富める場所に住む少数の知識人のものの見方の習性を一般化している。その見方は「モダン」な人々が最初に身につけるものであり、現実的な対立や論争をもたらす、党派に基盤を置いた、伝統的な政治学を解体するための必要条件である。それは誰も見物人であるということを前提にする。それはかたくなに、不真面目に、世界には現実の苦しみは存在しないことを示唆する。しかし、他の人々の苦しみを見物人になったりならなかったりする、怪しげな特権を享受している富める国々を世界だとみなすのは、途方もなく間違っている。ちょうど、戦争と戦争の巨大な不正・恐怖をじかに体験していないニュースの消費者が、自分の思考の枠組みに基づいて、他人の苦しみに反応する能力を一般化するのが途方もない間違いであるように。テレビ映像に慣れているというには程遠いテレビの視聴者が何百万人もいる。現実を操作するという贅沢とは縁がない人々である。》

現実とは必然的にメディアを生み出す。ところが、人々がメディアを通じてしか現実というものを知る機会をもたなくなることによって、メディアによって作られた現実にのみ接するようになる。情報化社会の到来であるが、この情報化社会の陥穽は、メディアによって作られる見せかけの現実のみ人々が消費者として戯れて、メディアによってすくいとられない現実の中に、自分の全感覚や手足をもって踏み入らなくなっているところにある。いや、メディアによって作られる見せかけの現実が、メディアではみえない現実のなかに人々が踏み入ることを阻害しているとさえいえる。なぜなら、大量のメ

ディア的現実には消費者としてしか振る舞えなくなっている人々は、もう知^うて^いる^こと^に対して飽き飽きしており、つねに飽和状態になっているからだ。メディア的現実が欲求しているのは消費者であるが、しかし、現実というものは体験者を求めている、消費者を求めているわけではない。

メディアは見せかけの現実を我々に消費するようにたえず強要して、現実そのものに足を向けなくさせているだけではない。メディアが光を当てた見せかけの現実にはかもはや現実には存在せず、それ以外の現実にはありえないと強力に断言している。メディアの関心によって現実には取捨選択され、分断されてしまうのだ。この事態は、メディア抜きに現実には存在しなくなっているということをわれわれに告知している。というより、メディアが介入することによってしか現実には起こりえなくなっているということを、我々に日々思い知らせている。情報化社会が「スペクタクルの社会」を用意しているのは、必然なのだ。メディアのなかにしか現実が存在しないように思われるなら、人々は消費イメージとして《有名人になることを志向》することに、全精力を注ぐようになる。

しかしながら、現実というものは生きるためのものであって、消費者として眺めるためのものではない。メディアによって作られる見せかけの現実にはだが、《誰もが見物人であるということ」を前提にする。それはかたくなに、不真面目に、世界には現実の苦しみは存在しないことを示唆する。しかし、他の人々の苦しみを見物人になったりならなかったりする、怪しげな特権を享受している富める国々を世界だとみなすのは、途方もなく間違っている。》とソントグがいうとき、彼女は先進国の我々の《誰もが見物人であ^らざるをえなくなっている、「スペクタクルの社会」に生きているという事実をけ^っして否認しているわけではない。先進国の我々が「スペクタクルの社会」に生きるようになったからといって、世界の《現実がスペクタクルと化したと言うことは、驚くべき偏狭な精神である。》と批判しているのだ。我々が見物人として享受しているテレビ映像のなかの他の人々の苦しみは、それらの人々がけ^っして見物人になりえない現実を映しだしているのである。

「スペクタクルの社会」に生きている特権的な我々と、「スペクタクルの社会」とはおよそ無縁な、生身の現実のなかで苦しんでいる膨大な人々とがこの世界には住んでいるのに、大量のメディアに覆い尽くされたバーチャルな生き方をしいられている我々のありようを、「スペクタクルの社会」として一般化しようとする少数の知識人たちの世界の見方を彼女は批判しているのであり、その見方こそが世界中の無関心に苦しむ現実を不断に生み出していることを指摘しているのだ。メディアの関心によって作られる現実には所詮見せかけの現実であり、生身の現実ではありえないように、見せかけの現実への関心が生身の現実に入人を踏み入らせることもありえない。確かに情報化社会がメディアの関心に左右される「スペクタクルの社会」に移行しているとしても、人々が膨大なイメージのなかを掻き分けて現実の^{ひだ}襞に触れていくようになるのではなく、イメージへ

の関心が生身の現実への関心を遮ってしまっているところに、「スペクタクルの社会」の空虚な浮遊性が浮き彫りにされている。

いうまでもないが、現実と現実が生みだすイメージとは二分することができず、イメージもまた現実の一部にほかならない。にもかかわらず、現実が生みだすイメージによって現実そのものが覆われてしまい、メディアがイメージ操作を加速させることによって、現実そのものが歪められ、見えなくさせられてしまうところに問題は集中している。

《戦争の勝敗を決めるのは、ひとえにメディアであって、サラエヴォあるいはボスニアで生起する事態によってではない》という、フランスの学者たちの主張ほど、戦火のサラエボで『ゴドー』を演出・上演してきたソントグの必死の行動を逆撫でするものはなかった。なぜなら、セルビア軍によって包囲されているサラエボの絶望的な状況にいくらかでも世界中の関心が集まって、解決への糸口が切り開かれることを願って現実のなかで苦闘しているのに、そんな努力よりもメディアに関心をもたれる努力を払うことのほうが、《戦争の勝敗を決める》の役に立つといていたからだ。

「スペクタクルの社会」のなかでは、戦争もまた、メディアの戦争を必然的に伴っており、というより、メディアの戦争に大きく覆われているから、実際の戦争に左右されるよりも、メディアの戦争に勝敗が左右される要素が大きくなっている。つまり、軍事行動で有利に押し進めていても、メディア戦争で後れを取るなら、戦争に負けてしまうということである。ソントグが身をもってかかわったサラエボでの戦争は、その典型であった。彼女は世界中の関心を喚起しようとして、戦火のサラエボで『ゴドー』を演出、上演したが、専門の「戦争広告代理店」が介入することによって、ボスニア紛争が世界中の関心を集めることに成功し、弱小のボスニア軍が強大なセルビア軍に勝利することになった。そう、ソントグの『ゴドー』上演などよりもはるかに国際世論に強力な影響を「戦争広告代理店」は発揮して、軍事的に勝てる筈のない戦争を引っくり返してしまったのである。

『ドキュメント戦争広告代理店』のなかの序章で、著者の高木徹は92年の春に始まり、95年の秋まで続いた旧ユーゴのボスニア紛争による勝敗が、ボスニア・ヘルツェゴビナとセルビア共和国にその後、どのような明暗をもたらしたかを、双方の首都サラエボとベオグラードを引き合いに出して、次のように記述している。

《もし、サラエボの美しさをもっと身近に感じなければ、坂道を降り、街の中心を訪れることだ。ヨーロッパの空気を漂わせるメインストリートに並ぶカフェで、トルコ風の濃いコーヒーを飲みながら、街を歩く女性たちを眺めればよい。ある人は黒い眼に茶色の髪、またある人はブロンドに薄い色の目と、バラエティに富んだ、しかし例外なく目を見張るほど美しく、素晴らしいスタイルの女性たちを目の当たりにすることができる。それはとりもおさず、この街では様々な民族が暮らし、長い間に多くの血が混じり合ってきたことのあかしだ。》

週末の夜になると、サラエボはさらに華やかになる。さして大きくはないこの都市の、どこにこれほどの人がいるのだろう、と思うほどに人々が集まってくる。商店は遅くまで店を開け、ショーウィンドウには世界のブランド品が飾られる。カフェは路上にパラスとテーブルを出し、そこで人々はビールやワインを飲む。よく見ると、その中に軍服姿の若者が多いことに気づく。(…)彼らの袖に目をやると、イタリア、ノルウェー、モロッコ、アルゼンチン、色とりどりの国旗が縫い付けられている。(…)カフェから聞こえる人々の会話も、英語、フランス語、ドイツ語とさまざまだ。この街には世界各国の人々が集まっている。彼らがこの国で支払いに使うお金は「コンバーチブル・マルク(ボスニア・ヘルツェゴビナの中央銀行が発行する紙幣)」。EUに入っていないこの小国で、欧州各国で流通するユーロと、いつでも固定されたレートで交換できる通貨が使われている。中央銀行の金庫には、市中に出回るコンバーチブル・マルクと同額のユーロが納められ、この制度を保障しているのだ。その原資は、世界からこの国につぎ込まれた援助だ。この街のきらびやかさの源には、西側先進国をはじめとした国々から競うように流れ込んでいるお金と人と資材がある。》

ソントグが、《1945年のベルリンや東京とあまり変わらないように見える廃墟の都市》のなかで、暖房も窓ガラスも電気も水もなく、わずかの食料しかない、《世界最大の強制収容所》で人々が暮らしていると記していたサラエボの光景と想い較べてほしい。他方の《ベオグラードの街を覆う空気の色は「灰色」だ。建物も、街も、店も、すべてがすすけている。ガソリンスタンドには貴重な燃料を求める市民の車が列をなし、暗い地下道には露天の商店が軒を並べ、闇の商品流通がこの国の経済の根幹をなしていることをうかがわせる。そして、東京なら霞が関や丸の内にあたる主要な街区のあちこちで、かつて内務省や、放送局や、そのほかの重要施設だった巨大なビルが、NATO空爆でトマホークミサイルの直撃を受けたままの瓦礫の山となって放置されている。「虐殺者」「人道の敵」のレッテルを貼られたセルビア人の首都は、国際社会から締め出され、見捨てられた姿のままである。》

すべてがメディア戦争の勝敗の結果である。《PRや情報戦が、「実」の戦いの帰趨^{きすう}のすべてを決めるわけではない。しかし、「虚」の戦いが「実」の戦いの行方に大きな影響を与えることも事実だ。「情報の国際化」という巨大なうねりの中で「PR」=「虚」の影響力は拡大する一方であり、その果実を得ることができる勝者と、多くを失うことになる敗者が毎日生み出されている。》と著者は記し、PR戦争が戦争や経済を含むあらゆる局面で重要性を増していることを説く。「スペクタクルの社会」とは「PR」=「虚」の影響力に左右される社会であり、そこで一体、人間にとってどのような大事なことが失われていくのかを見通す視力の重要性も増していることを、ソントグは指摘していたにちがいない。

2003年11月9日記

